

第1回北海道PTパラスポーツwebミーティングを開催して

健康スポーツ局 障がい者スポーツ支援部長 塚田 鉄平

障がい者スポーツ支援部では、12月5日に道内でパラスポーツに関わっている、また興味を持つ者15名が集まり第1回北海道PTパラスポーツwebミーティングを開催しました。

TOKYO2020 パラリンピックが終わり、会員の多くの方がパラスポーツに興味を持ったのではないかと想像しています。パラリンピックの土台である、地域のパラスポーツの裾野に関わる理学療法士が増えていく事を目的に、ミーティングでは競技分野、地域分野、子ども分野の3つの立場から実践を発信してもらいました。



競技分野からは日本パラスポーツ協会公認パラスポーツトレーナー資格を取得し、パラカヌー日本代表トレーナーとして活躍されている倶知安厚生病院の榎館強拓先生から世界大会などの選手に高い競技レベルが求められる場面で生かす事ができる機能評価、障がいの理解などの理学療法士の専門性について報告していただいた一方で、パフォーマンスアップなどのトレーニング指導では知識・実践が不足しているためトレーニング関係の資格での補完が必要な事やコロナ禍で遠征・合宿帯同などが病院勤務で難しかった事等について報告していただきました。

子ども分野では、北海道立旭川子ども総合療育センターの堤崎宏美先生からお話していただきました。当センターを受診する子どもたちは先天性疾患を持つケースが多く、スポーツに必要な運動能力が低く視覚認知や知的の問題などからもルールの理解が難しいです。そういった子どもたちにもスポーツの楽しさを経験し、活動性を高め社会参加を促すことを目的として、2020年より年1回、「パラスポーツ親子入院」を企画し、ポッチャや玉入れ・スラローム・ブル体験など、児の運動能力の評価をもとに、スポーツをその子にあわせたルール変更や、手作りの道具を使って3泊4日で実施しています。参加者の満足度も高く、スポーツに関わるきっかけとして地元のスポーツ活動に繋げていきたいと思っています。また、現在外来リハで増えている発達障害児に対するリハビリメニューの中にもパラスポーツを取り入れ、からだを動かす楽しさとスモールス

テップによる「自信」を持たせる介入をしているとのことでした。親子入院の動画も見せていただき、スタッフの関わり方は大変参考になるものでした。

地域分野からは旭川フェンシングクラブで代表をされている旭川医科大学病院の田中伸吾先生にお話していただきました。関わりとして競技力向上だけではなく、障がいに合わせたリスク管理、スポーツ環境の構築、運営を行っており、パラスポーツ専用道具に関しては高価であるためクラウドファンディングなどを使用して整備を行った。また、健常フェンシングについても競技人口が少なく、車いすフェンシングでは国内でも数える限りでもあるので、健常者を交えたりする事で健常フェンシング選手に関するメリットも含め、競技者母数を増やす工夫をしていると報告していただきました。



意見交換の場では車椅子バスケットボールの道内のクラス分け委員の不足や障がいを持った児のスポーツ工夫などがさらに話され、今回3演者からの報告とともに貴重な会となったと考えています。

パラリンピックでは厳しいクラス分けや競技用具の設定などは厳格に決まっていますが、パラスポーツではルールや道具を変更する事で健常者も含め重い障がいを持たれた方が幅広く楽しむ事ができるスポーツです。各地域でマンパワー、パラスポーツ環境が全く異なっていると推察しますが、障がいを持たれた方の運動環境を拡げるために、障がい者スポーツ支援部では地域のスポーツ指導員(日本パラスポーツ協会のスポーツ指導員)と理学療法士が一体となってパラスポーツ環境が構築する事をサポートしていきたいと思っています。

また、今後もパラスポーツに関する発信を継続して行ってきたいと思います。

パラスポーツに関する相談があれば、dsports.health.hpta@gmail.com(Oを@に変更して)まで!